DOBOKU × カルチャー

人のために豊かさや便利さを提供する土木を、生活のなかに浸透させていくこと。「DOBOKU×カルチャー」では、私たちと土木の距離を縮めてくれる、そんなコンテンツを紹介します。

第20回『浮世絵②』
～江戸の治水と利水

1880年（明治13年）ごろ、小林清親作「茶の水雪」。浮世絵としては近代の明治時代の作品で、雪景色の御茶ノ水の風景を上品で個性的なタッチで描いた雰囲気がある1枚。神田山を掘り割って谷状になったところに流れる神田川と掛樋の風景が、当時の人々の生活に定着している様子がうかがえる。右上に描かれた小屋からも分かる通り、川沿いの地形が崖になっていることも見て取れる。（所蔵:国立国会図書館）

江戸時代に成立し、日本を代表する芸術作品である浮世絵。浮世絵の祖とされる菱川師宣をはじめ、葛飾北斎、東洲斎写楽、歌川広重など名立たる浮世絵師が登場し、世界に日本のアートを誇示した。浮世絵には人物や風景など様々なモチーフが登場しているが、なかには土木に関係する施設や土地の特徴が描かれているものがある。これらを紹介しながら現在の東京が形づくられるに至った歴史を紐解いていく。

御茶ノ水付近での大規模土木工事

河川の氾濫などの災害を防ぐ治水対策。低地での都市計画は難しいもので、徳川家康も江戸の治水対策に頭を悩ませたという。何度も水害に見舞われていた江戸の市街地。少しでも被害を抑えるため、家康は凹凸地形の自然条件をしっかりと見極め、高低差を織り込んで、見事に江戸の上水の仕組みを築き上げた。

江戸で大都市計画を進めたのは、家康が江戸に幕府を開く前だったという話は前回（第19回浮世絵①）で触れた通りだが、都市の土台づくりは、掘割と水路の開削から始まった。そして、家康が征夷大将軍となった1603年ごろから全国の諸大名による天下普請事業が進められ、まず日比谷入江の埋め立てが行われた。

現在の御茶ノ水の神田川の様子。当時の切通しの名残で川沿いの地形は高さがあり、谷状の地形の中で神田川が流れている。その脇にJR御茶ノ水駅があり、2021年12月現在、大規模な改良工事が行われている。

そして、大阪の陣に勝利し、徳川家の権力が最高潮に達した1620年ごろから始められたのが神田川の付け替え工事である。当時の神田川は井の頭池の水源を中心に善福寺池、妙正寺池から流れ出た川が途中で合流しており、最終的に日比谷入江に流れ込んでいた。しかし、江戸城下の洪水被害に悩まされていた幕府は、合流させた川を隅田川に流すという新たなプランを打ち出す。そしてこの大規模な土木工事を幕府から命ぜられたのが仙台藩であった。

付け替え工事にあたり課せられた大きなミッションが、神田山を真っ二つに分断して現在の御茶ノ水付近で切通しを造ることだった。水道橋から神田山を掘り割って両国橋に至る放水路の流路を造るというのは難工事であったが、仙台藩主の伊達氏は大手門石垣修築と併せて多くの

資金を投入し、1620年に仙台濠の原型を造り上げた。1660年には拡幅工事も担当。仙台濠は現在の神田川の下流部の原形となり、舟運にも利用されるようになったといわれている。

もしかすると伊達氏の勢力を近くで感じていた幕府が、その勢いを封じる狙いもあって仙台藩に難工事を命じたのかもしれない。しかし、その思惑を打ち破るかのように伊達氏は、藩の威信にかけて大事業を成し遂げた。実際にJR御茶ノ水駅から秋葉原駅にかけて神田川沿いを下ると、都心とは思えないような谷状の地形が続いているのが実感できるだろう。現在「仙台堀」とも呼ばれる通り、仙台藩による大規模な土木工事によってこの景観が造られたのである。人工的な渓谷が都会のど真ん中にある都市は、世界的にみてもなかなかないだろう。

放水路の完成によって日本橋方面の洪水被害はなくなったが、放水路の周辺の外神田一帯が新たに水害に見舞われる結果となってしまった。このことからも江戸幕府の治水対策はまだ発展途上だったとことがうかがえる。

幕府のライフラインとなった神田上水

太田道灌によって江戸城が築かれた1547年ごろ、江戸の街の飲料水は井の頭池からの流水と赤坂溜池の湧き水などで賄われていた。そして江戸時代に入り、人口の増加によって飲料水が不足すると、幕府は6つの上水の整備を始めた。中でも神田門から江戸城内に入り利用されていた神田上水は、幕府のライフラインを支えた上水の一つである。

昔の上水は、その多くが石垣樋（いしがきひ）や木樋（もくひ）の中を流下させるだけの自然流下方式だったが、神田上水の一部分ではサイフォン式が採用されている。これはこの土地の特徴が関連している。神田上水は、井の頭池、善福寺池、妙正寺池からの水を集め、現在の文京区関口付近で堰を設け分水していた。本郷方面から神田方面へと水を通すために障壁となっていたのが御茶ノ水付近の崖だったのである。そこで飲料水を通すために掛樋（かけひ）が作られた。

近くに架けられた橋に「水道橋」と名付けるほどシンボリックな施設だった掛樋は、多くの浮世絵師たちの目にも留まった。今では、神田上水掛樋は遺されていないが、神田川沿いの遊歩道には石碑が建てられ、その碑にも浮世絵が描かれている。江戸幕府にとって念願かなって造られたともいわれる神田上水は、明治維新後も飲料用に利用され、さらに1886年のコレラの大流行を経て1901年に閉鎖されるまで、ライフラインとして多くの人たちを支え続けた。

上／水道橋駅周辺の神田川沿いの遊歩道にある神田上水掛樋の碑。碑には鈴木春信画「絵本続江戸土産」が印刷されている。
左／現在の水道橋。橋には石板が設置されており、当時の神田上水掛樋の様子が描かれた、長谷川雪旦画「江戸名所図会」が彫られている。

1857年（安政4年）ごろ、歌川広重作『名所江戸百景』より「水道橋駿河台」。鯉のぼりを大きく描き、背景に街を見渡せるような遠景を描くというダイナミックな構図で、江戸の人々の生活を表現した。広重の腕前が光る1枚。その景色の右下に水道橋が描かれており、江戸の人々になじみがあったことがうかがえる。（所蔵：国立国会図書館）

18世紀には江戸を人口100万人を超える世界最大級の都市へと成長させた江戸幕府。その発展の裏には、地形を活かした治水と利水が関わっていた。多くの浮世絵に河川や海、溜池などの水域が描かれていることからも、江戸と水が切っても切り離せないことが分かる。そして、人々の生活を支える水を生み出したり、水害を防いだりしていたのが土木工事であったことはいうまでもないだろう。

〔参考文献〕陣内秀信「水都 東京－地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外」ちくま新書、2020年／五味碧水「お茶の水物語」吉井書店、1960年／大石学「首都江戸の誕生　大江戸はいかにして造られたのか」角川選書、2002年／松田磐余「江戸・東京地形学散歩 災害史と防災の視点から」フィールド・スタディ文庫、2008年／芳賀ひらく「デジタル鳥瞰 江戸の崖 東京の崖」講談社、2012年／岡本哲志「地形で読みとく都市デザイン」学芸出版社、2019年